

パネルディスカッション「日露戦争はどう語られてきたか～明治末・満州・再生～」

## 日露戦争と女性の国民化

—小栗風葉『青春』の世界—

山田 順子\*

### はじめに

起源を問うまでもなく今日、歴史学と文学はそれぞれの学問領域を確立している。しかし、成田龍一氏によれば<sup>i</sup>、現在のように画然と各々のジャンルが形成されたのは、1887年にドイツの歴史学者リースによって帝国大学に史料科が、ほぼ同時期に芳賀矢一らにより帝国大学国文学科が設けられたことに端を発するという。成田氏は歴史学においても文学においても「〈くに〉」を選択し、「〈どのように〉」解釈し、「〈いかに〉」叙述するか、という基本的な構造は変わらないとし、歴史学においても出来事を選択、解釈、叙述の方法に恣意性があると指摘する<sup>ii</sup>。

文学と歴史学の相違点の一つを「語り」のスタイルの違いと捉えるならば、文学研究の立場から作品の背後に描かれた歴史事象を浮かび上がらせることは、無意味な試みではあるまい。相補的に作品分析において、背景にある歴史事象を踏まえることで、作品に描かれた表象を同時代的文脈の中に置き直すことは、新たな読みの可能性を開くことに繋がる。本稿では、日露戦争時にその戦況とともに『読売新聞』に掲載された、小栗風葉『青春』の物語世界を考察する。小栗風葉（1875～1926）は尾崎紅葉に師事し、自然主義の揺籃と目された龍士会に加わる。1907年、時の総理大臣西園寺公望が私邸で文士をもてなした雨声会にも招かれており、当時、影響力のある文士の一人と

して認識されていた。風葉の代表作の一つである『青春』は1905年3月5日から1906年11月12日まで『読売新聞』に掲載された。

ここで『青春』のあらすじを簡単におさえておきたい。作品は春、夏、秋の巻で構成されており、新聞掲載時、明治30年代の6年間を作品内の時間として設定している。春の巻において、成女大学に通う小野繁は、友人園枝の家に下宿する文科大学生の関欽哉と恋仲になる。春の巻から二年後の夏の巻において、繁は欽哉との婚前交渉により妊娠するが墮胎し、欽哉は墮胎罪に問われる。夏の巻から三年後の秋の巻では、刑期を終えた欽哉を繁が迎えに行き、二人は結婚に向けて動き出す。しかし、恋愛の真の目的が生殖であることを確認し最終的に別れる。欽哉が豊橋の村に帰郷するのと前後して、天長節の日に新橋駅では同盟国の国賓をもてなす歓迎会<sup>iii</sup>が行われている。世間の華やかさとは裏腹に立身出世の道を踏み外し、「恋愛の犠牲」となった欽哉に残された道は、最早居場所のない故郷に戻ることであった。欽哉は許嫁の房の後追い自殺を仄めかす手紙を繁に送るが、繁は社会主義研究者である北小路の、叔父の斡旋により満州に新しく建つ「志那人の女学校」の教師となることを決意する。

### 1. 統一的な国民意識の崩壊

日露戦後に、統一的な国民意識の崩壊が問題とされていたことは既に知られている<sup>iv</sup>。徳富蘇峰はこのような青年たちを「国家生死存亡の大事を

\*お茶の水女子大学大学院院生

よそに見てなんらの杞憂を覚えざる無頓着の輩」(「青年の風紀」『国民新聞』1904年9月28日)と名指し警鐘を鳴らしている。『青春』においては、最終的に大尉となる軍人の速男と、新体詩と恋愛にうつつを抜かし大学を中退する詩人の欽哉が対照的に描かれている。物語序盤で欽哉から影響を受ける速男は次のように描写される。「忠君愛国と云ふ観念より外には頭に無い武人の事であるから、然ういふ哲学懸つた問題や詩的な話柄は耳希しい、是迄知らなかつた心象や新思想が然も神々しく目に浮ぶ……」(『青春』上・一、15頁)しかし秋の巻で北小路と速男が欽哉について噂をする場面では、「関の煩悶は、旋て又時代の煩悶とも言ひ得られるので……少くとも、現代青年の一般の傾向が、那の男に由つて代表されて居るやうに思ふ。我々現代の青年は、欧州文明の新しい学問や芸術、及至宗教などに多少皆涵養されて居るので、智識に対する熱心な渴望とか、或ひは感情の微妙な点とか、然ういふ智や情の上に於いて、到底老人や先輩の解し得られない発達を為て居る」(『青春』下・十五、178頁)が「老人先輩」のような「意志の修養」が欠けていると北小路から批判されるのである。この欽哉こそが「新時代の代表者」、「旧文明から新文明に移る過渡時代の犠牲者」であり、先に蘇峰が問題視していた「国家生死存亡の大事になんらの杞憂を覚えざる」煩悶青年として形象されている。

## 2. 平和的膨張論から民族膨張論へ

大学を中退した欽哉とは対照的に繁は大学を卒業し、欽哉が拘留されている間も独立自活の道を探っている<sup>9</sup>。自立したヒロインとして描かれた繁が決意した満州行きには同時代の歴史事象、すなわち膨張論が密接に関連している。特に満州行きに関与した京都の華族、北小路が社会主義研究者である点は大きな意味を持つ。日露開戦前、幸徳秋水はロシアとの戦争を回避し代わりに経済

的に満州に出て行くこと、つまり「平和的」膨張を提唱していた。1903年7月3日の『社会主義』に掲載された「非開戦論」<sup>10</sup>では日清戦争における御用商人、軍人、軍吏の利益追求を批判し、百姓と労働者の犠牲、そして戦後不況を国家の最大不利益として嘆いている。さらに「今日、日本の急は露西亜と戦ふことではない、實際的に経済的に満州に出て行くより外はない。即ち沢山の人間を移住させ、資本を投じて、固着せる土地に密着して、富を吸収するに如くはない」と論じる。この後、日露戦争は実際に勃発し、変わって民族膨張論が盛んに唱えられるようになる。繁の満州行きの理由が語られる場面が次の部分である。「今度志那人の女学校が満州に立つさうで、君の叔父さんの侯爵が、女教師の此の、人選を依頼されてたことが新聞に出てたさうだ、僕は気が付かんが……それで、小野が是非自分を遣つて貰ひたいから、君から一つ侯爵に頼んでくれつて事だが、何うだろう？」<sup>11</sup>という速男の言葉を受け、北小路は承諾する。「だが……大丈夫だろうか？内地なら左に右く、満州まで踏み出すつて事は、女にや些つと奮発過ぎるからね。那麼事になつたものだから、一時の此の、気紛れに思立つて見たんじや無かろうか？」と心配する速男に対して北小路は「究り女丈に、骨肉の冷遇や、郷党の悪評などを非常に深く感ずるし、それに男と違つて、今日まで那して遣つて来た富人の心持になつたら、なかなか一通りならぬ辛抱だつただらう。だから、意志も自然其の間に鍛へられたらうし、那なると却て女の方が強いものだ！」(『青春』下・十五、179頁)と語る。ここでは欽哉に欠けていた「意志の修養」を経験した繁の決意が、北小路の楽観的な言葉により明らかにされる。しかし、婚前交渉により墮胎した繁には「骨肉の冷遇」や「郷党の悪評」といった世間からの冷たい眼差しが向けられていた点は見逃せない。

### 3. 女性の国民化

自身を包囲する世間の白眼視から逃れ、日露戦後に満州に行く繁に期待された役割とは何であったのか。1905年11月の『婦人画報』に「満州の貴婦人」と題して次のような記事がある。「満州に於ける婦人の地位が前記の如き有様なりとせば苟も教育あり思慮ある日本婦人は進んで彼の地に渡航し先づ彼等貴婦人の啓撥誘導に努め且つ精神上的感化を与うるは蓋し我国が同地に於ける戦後の経営上に多大の効果を収むべき必要の事業なるべし」と現地から戻った人物の言葉として挙げている。「教育あり思慮ある日本婦人」がすすんで渡航し、現地の婦人に「精神上的感化」を与えるよう解いている。ここには明らかに日本一上位、「彼の地」一下位という認識構造が存在する。「志那人の女学校」の教師として現地に赴く繁には、遅れた地の婦人の啓蒙という使命が課されていた。先にも触れたように繁の満州行きには、殖民政策を積極的に支持する知識人たちの移住奨励の言説<sup>viii</sup>が大きく影響していたと考えられる。女性が国家に組み込まれていく過程、すなわち「女性の国民化」<sup>ix</sup>については既にいくつかの先行研究があるが、菅聡子氏は「国家有用の人材」たるべく、国家の期待する女性教員として自己形成しなければならなかった官立の東京女子師範学校の生徒たちに注目する<sup>x</sup>。菅氏によれば、彼女たちは「美子皇后を具体的モデルとし「教育勅語」を奉じながら、女子教育者として全国に散っていった」という。同校の同窓会である桜蔭会は、1900年代から積極的な海外進出の姿勢を見せていた。教師として「国家有用の人材」たるべく日本の権益拡大の場である外地に赴くことを「女性の国民化」と捉えるならば、繁の満州行きこそが、女性が国家に組み込まれる過程をあらわしていることになる。さらにいえば、国民意識の希薄化が問題とされた煩悶青年の代表として描かれた鉄哉との対照により、女性である繁の国民化は増々、際立ったもの

となっている。

#### おわりに

婚前交渉、妊娠、墮胎、欽哉との結婚準備の破綻を経験し、家父長制下、良妻賢母主義の逸脱者となった繁は、外地の女性を感化啓蒙する使命を背負い満州行きを決意する。『青春』が掲載された『読売新聞』では、この時期、満州という言葉が連日のように紙面に現れ、戦況や日露戦後処理における混乱が報告されている。『青春』自体には、日露戦争の戦況は盛りこまれていない。しかし、結末における繁の満州行き決意こそが日露戦争を取り巻く当時の歴史事象と深く関わっている。『青春』には、膨張論に影響され、国内で生き場を失った女性が国民化されていく過程が描かれている。もちろん、移住者、出稼ぎ者として外地に赴く女性たちに、身を売ることを生業とする者が圧倒的に多い中<sup>xi</sup>、繁が教師として赴く点には注意を払っておく必要がある。最後に、先の菅氏は現地の女性に対する皇民化教育について、朝鮮を例に次のように説明する。「[皇民化]教育においては、日本人教師が朝鮮民衆の「皇民化」を担う立役者だったのであり、統治政策の中での日本人教員の重要性は大きかったとするならば、「同校の卒業生たちが、植民地において女性教師としてどのような教育を行ったのか」を問う必要があると述べる。さらに、教育を施す側の女性と、享受する側の女性たちの間に「国家的支配関係を無化する」関係性、女性同士の連帯の可能性が「夢想される余地」が残っていたのかどうか、そのことに目を向けるよう促している<sup>xii</sup>。女性教師たちが、実際に現地でどのような教育を行ったのか、その点についてはさらなる検証が必要である。

※本文の引用は『青春』上、下（岩波書店、1994）を使用し、ルビは省略し適宜旧字は新字に改めた。

## 注

- i 『増補〈歴史〉はいかに語られるか』(筑摩書房、2010、18頁、84頁)
- ii 一方で、歴史学における典拠と史料の検証に科学的な実証性を求めている。成田龍一前掲書、51頁
- iii 『読売新聞』1905年10月11日に「市中の歓迎イギリス艦隊の帰着」とあり、10月25日に「昨日の新橋 東京市凱旋歓迎会出席の東郷大将一行入京の模様」という記事がある。秋の巻は日露戦争の勝利に沸いている1905年の設定ということになる。
- iv 『日露戦後文学の研究』上(文巧社、1985、5頁、6頁)によれば、国木田独歩『号外』(明治39年8月)には「日露戦争中には成立していた統一的国民意識が、戦後には消えて「赤の他人同士」となってしまった、その状況のスナップ」が描かれているという。この作品からは「日露戦後において、国民意識が大きく変貌している」ことを読み取ることが可能であり、「ほぼ、明治三十九年から四十年代にかけて国家の欠落がはじまった」という。大塚保治は「国民的精神の一頓挫」(明治38年12月)を出版し、清原貞雄はその後に来た風潮をさして「日露戦争以後思想界の浮華動揺」と呼んでいると説明する。
- v 繁の自立については、拙論「小栗風葉『青春』論—ヒロインと脱〈青春〉」(『國文』第115号、2011年9月)で分析を行った。
- vi 『幸徳秋水全集』第4巻(精興社、1968、414頁)
- vii 1905年3月4日の『読売新聞』に「占領地の学校設立」という記事があり、「満州軍政施行地に新式学校を設立し清国人を教化するハ必要なる事」であり、現在蓋平に師範学堂を設立計画中であり、他の場所でも同じ計画が持ち上がっていると伝えている。女学校ではないが、『青春』本文と近い内容となっている。
- viii 他に大隈重信「大和民族膨張と殖民事業」(『殖民世界』1908年5月)などがある。同じ雑誌に掲載された白蓮上人「軍神広瀬中佐より日本国民に与ふるの書」には「幾数十万の軍人が満州不祀の鬼と化してより以来茲に五年、而も生残り居る日本人同胞は意気地なく、我等が血を流し、骨を埋めて漸くに獲たる満州朝鮮の利源を殆ど其儘に放棄し居るの観有之候、亡者の如何何物か之に如んや」とあり、日露戦争時、多くの犠牲のもと獲得した満州に殖民に出ていかない内地の人々を批判している。
- ix 小山静子『家庭の生成と女性の国民化』(勁草書房、1999)、若桑みどり『皇后の肖像』(筑摩書房、2001)
- x 菅聡子『女が国家を裏切るとき』(岩波書店、2011、54頁)
- xi 倉橋正直『からゆきさんの唄』(共栄書房、1990、103頁)では、当時の満州における移民女性の実態が次のように説明されている。「一九〇七年五月の遼陽における在留日本人の状況である。女、二四〇名中、酌婦、芸妓合わせて九八名を占めており、また事実上の女郎部屋である料理店が一二軒であった。このように、当時の日本の満州進出には、売春婦を先頭に入ってゆくという側面が、たしかに存在していた。」
- xii 菅聡子前掲書、64頁